

エッセイ 楽しい“虫音楽”の世界 (その16 「四季」の中の昆虫—海外編)

昆虫芸術研究家

柏田 雄三 (かしわだ ゆうそう)

海外の「四季」の曲に移る。アントニオ・ヴィヴァルディ (1678～1741) の《四季》は春夏秋冬で完結する曲に思われがちだが、ヴァイオリン協奏曲集「和声と創意への試み」全12曲の第1曲から4曲である。

それぞれ急緩急3楽章の伝統的な様式で、すべての楽章にソネット (14行詩) が添えられている。その中の動物は夏の第2楽章のハエ、春の第1楽章の小鳥、夏の第1楽章のカッコウ等の鳥、秋の第3楽章に顔を出す猟犬である。曲は描写的でハエの部分では農夫を困らせる様子がヴァイオリンで表される。

ヨーゼフ・ハイドン (1732～1809) は車大工の息子で子供時代を農村で送った人である。その生い立ちのためだろうか、オラトリオ《四季》では農家の労働や神や自然への感謝と畏敬が謳われる。春には蜜蜂が巣から飛び立ち、夏にはコオロギが草の中で歌う。ウィンナ・ワルトの始祖と呼ばれるヨーゼフ・ランナー (1801～43) の《四季》では嵐や狩等が軽やかに表されるが動物は出てこない。

ファニー・ヘンゼル (1805～47) はフェリックス・メンデルスゾーン姉妹の姉で、弟と同じく優れた作曲家であった。彼女の代表作の一つピアノ曲集《12か月》やフェリシアン・ダヴィド (1810～76) の耳当たりがよいだけの弦楽五重奏曲《四季》、他の作曲家の同名曲を意識して作られたらしいイサーク・アルベニス (1860～1909) のピアノ曲《四季》に特定の季節は感じられず、インドの「四季感」を表現したジョン・ケージ (1912～92) の《四季》は一般的な季節のイメージからかけ離れる。

ピョートル・チャイコフスキー (1840～93) のピアノ曲《四季》は1月から12月までの風物を表した曲で6月の〈舟歌〉11月の〈トロイカ〉は誰しも耳にしたことがあるだろう。3月の〈ひばりの歌〉では美しい鳴き声が哀愁を帯びて表現される。フーゴ・ヴォルフ (1860～1903) のゲーテ歌曲集の《四季すべて春》では春の喜びを色々な花と恋人の美しさで歌う。アレクサンド

ル・グラズノフ (1865～1936) のバレエ音楽《四季》はロシアの凍てつく冬から始まり春の鳥を経て星座を仰ぐ秋で終わる。

クラシックとジャズにタンゴの語法を取り入れ独創的な曲を生んだアルゼンチンのアストル・ピアソラ (1921～92) の《ブエノスアイレスの四季》ももともと四季を意識して作られ始めた曲ではない。様々な楽器の協奏曲を作っているフィンランドのカレヴィ・アホ (1949～) のテルミン協奏曲《八季》。曲名はラップランドのサーミ人が一年を八季に分けることからきており、収穫から雪や霜、白夜を経て収穫に戻るサイクルを不思議な電子楽器テルミンの音で描写した。

このあたりで紙幅が尽きた。時代を追っていくつかの《四季》を駆け足で聴くと、自然を描写した曲の中で昆虫は片隅を占めるだけだ。日本と海外を比べると昆虫の存在感は日本の作曲家に軍配が上がるようである。

音楽用語で、曲が表そうとする題から聴き手を一定の方向に導き、題材と結びついた文学的・絵画的などの内容と関連した表現や暗示を目的とする器楽曲を「標題音楽」と呼ぶ。「四季」はまさに標題音楽的な曲名だが「これが春なの？」と首をかしげる曲もある。聴き手の私が悪いのだろうか。



ヴィヴァルディ 「四季」
ACCENT ACC 24179

NEWS

天敵殺虫剤「ギフパール」の販売を開始

アリスタ ライフサイエンス

アリスタ ライフサイエンスはこのほど、天敵殺虫剤「ギフパール」とギフパール用のバンカープラント「ギフバンク」の販売を開始した。

ギフパールの有効成分であるギファブラバチについては、2004年4月より農研機構野菜茶業研究所（現農研機構野菜花き研究部門）で基礎的応用的研究が行われ、ジャガイモヒゲナガアブラムシやモモアカアブラムシの天敵として有望であることが明らかとなった。その後2013年4月より農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業（農食事業）として研究課題「ギファブラバチの大量増殖と生物農薬としての利用技術の開発」が採択され、2015年1月20日に農薬登録を取得した。

ギフパール剤は、ギファブラバチ羽化成虫250頭/100ml（瓶）で、適用はピーマン（施設栽培）およびとうがらし類（同）のアブラムシ類。発生初期に10a当たり1～2瓶を放飼する。

また、ギフバンクはギフパール用バンカープラントとして、農食事業の課程で開発されたもので、コムギとムギヒゲナガアブラムシが3.5lスチロール容器に直接栽培・飼育されている。



100 ml ボトル

園芸用殺菌剤メジャーフロアブルを発売

日本農薬

日本農薬はこのほど、幅広い病害に優れた効果を示す園芸用殺菌剤「メジャーフロアブル」（有効成分ピコキシストロビン）の発売を開始した。

メジャーフロアブルはQoI剤（ストロビルリン系）であり、病原菌細胞内でエネルギーを生産するミトコンドリア内の電子伝達系複合体Ⅲの働きを阻害することにより殺菌活性を示す。病原菌のあらゆる生活環に作用するとともに、植物体内への浸透性にも優れているため、優れた治療・予防効果を示す。

また今回登録となった適用作物、病害に対して薬害の心配や耐性菌の影響が少なく、収穫前日数も短い使いやすさという特長もある。

適用内容は、ねぎのさび病・



250 ml ボトル

べと病・黒斑病、たまねぎのべと病・灰色かび病・灰色腐敗病、レタス・非結球レタスのべと病・菌核病・灰色かび病・すそ枯病など。

会社分割、農業製品とバイテク事業を新会社に承継

10月1日付けで、デュボン

デュボン社は、ダウ・ケミカル社との対等合併ならびにその後の独立した3社への分割にともない、10月1日付けで会社分割を行う。農業製品事業およびバイオテクノロジー事業については、経理・財務・法務・人事等間接的に関与する事業を除いた製造・研究・開発・営業等の事業を、7月29日に設立した新会社デュボン・プロダクション・アグリサイエンス株式会社に承継させる。

新会社の代表取締役社長には、後藤周司氏が就任。資本金は4億6千万円。本社住所は現行通りで、営業拠点は仙台事務所と福岡事務所。

また、電子・情報事業、プロテクション ソリューション事業、サステナブル ソリューション事業、ニュートリション&ヘルス事業およびインダストリアルバイオサイエンス事業は、デュボン・スペシャルティ・プロダクツ株式会社（田中能之代表取締役社長、4億6千万円）に承継。パフォーパンスマテリアル事業は現行通りデュボン株式会社（同、同）として営業する。

バイテク作物商業栽培20周年記念セミナーを開催

バイテク情報普及会

バイテク情報普及会は9月12日、都内千代田区のステーションコンファレンス東京で、「バイテク作物商業栽培20周年記念セミナー」を開催した。

第1部のテーマは「過去20年のふり振り返り」。国際アグリバイオ事業団（ISAAA）のポール・テン会長が、「世界におけるバイテク作物20年」、農研機構生物機能利用研究部門の田部井豊主席研究員が、「日本におけるバイテク作物20年」と題して、世界と日本のバイテク作物の20年を振り返るとともに将来展望についても言及した。

第2部のテーマは、「各界の立場から見たバイテク作物、技術に対する期待」で、東京大学大学院農学生命科学研究科教授の本間正義氏、日本バイオ産業人会議世話人代表の荒蒔康一郎氏、農林水産省農林水産技術会議事務局研究開発官の水元伸一氏、農研機構生物機能利用研究部門研究部門長の門脇光一氏、北海道北見市農業経営者の小野寺靖氏、食のコミュニケーション円卓会議代表の市川まりこ氏が、それぞれの立場からバイテク作物の現状と課題および今後の期待について持論を展開した。

第3部のパネルディスカッションは「どうしたら各界からの期待を達成できるか」をテーマに本間教授の司会で進行。会場からの質問や意見が交わされる中、遺伝子組換え作物は日本や世界の食料生産に大きく貢献する技術であり、そのベネフィットは誰でもが享受できる環境でなければならない。今後の技術開発と普及には産官学の連携が不可欠であり、社会に広く信頼される人材が正しい情報の発信を行う一方、メディアなどを通じた間違った情報については、その都度は正していく必要があるとセミナー全体を集約した。

第31回シンポジウム「植物ハイビジョン」を開催

都内・北とびあで、報農会

公益財団法人報農会（田付貞洋理事長）は9月14日、都内北区の北とびあで、第31回報農会シンポジウム「植物保護ハイビジョン 2016—変わる農業が抱える諸問題に挑む—」を開催した。日本応用動物昆虫学会、日本植物病理学会、日本農薬学会および日本雑草学会の協賛を受け、国及び都道府県の行政・試験研究機関や普及指導機関、農薬メーカーなどから約200名が参集した。講演テーマと演者は次の通り。

「耕作放棄地と農地集積が植物保護に及ぼす影響」山中武彦氏（農研機構農業環境変動研究センター）、「近年多発する獣害について—ニホンジカの脅威—」岡 輝樹氏（森林総合研究所野生動物研究領域）、「航空防除の変遷、現状と課題」森田征士氏（一般社団法人農林水産航空協会）、「超音波を利用した物理的害虫防除技術」小池明氏（徳島県立農林水産総合技術支援センター）、「栃木県における農産物輸出に関する取組について」高崎 正氏（栃木県農政部）

また、シンポジウム終了後、功績者表彰式が行われ、今回は次の3氏に贈呈された（業績例・氏名・職歴）。

「カキノヘタムシガ成虫の予察法の開発と適期防除の確立」伊東祐孝氏（神奈川県園芸試験場、神奈川県病害虫防除所等）、「モモ灰星病及びモモせん孔細菌病の発生生態の解明と防除法の確立」落合政文氏（福島県果樹試

験場・福島県農業短期大学校等）、「モモシンクイガの発生予察と安定的な無袋栽培の実現」高橋佑治氏（秋田県果樹試験場・日本植物防疫協会）。

シンポジウム「輸出促進戦略と植物防疫」を開催

都内・日本教育会館で、日本植物防疫協会

一般社団法人日本植物防疫協会は9月15日、都内千代田区の日本教育会館一ツ橋ホールでシンポジウム「輸出促進戦略と植物防疫」を開催した。国や県の行政、試験研究機関、普及指導機関、農薬企業、大学などから関係者約550名が出席した。

冒頭、上路雅子理事長は、「TPPの大筋合意を受け、農林水産業の新たな輸出力強化戦略が具体化しつつある。我が国農産物の特徴はその品質の高さにあり、それを支えているのが高度な病害虫防除技術といえる。どうすれば我が国農産物が世界で受け入れられるのか、農産物輸出の最前線を、我々植物防疫関係者は強力にバックアップしていかなければならない」とあいさつした。講演テーマと演者は次の通り。

「農林水産業の輸出力強化戦略について」中澤克典氏（農林水産省食料産業局輸出促進課長）、「我が国農産物の一層の輸出に向けて」高橋和宏氏（独立行政法人日本貿易振興機構（JETRO）農林水産・食品部部長）、「農産物の輸出促進に係る植物防疫上の課題と対応方針」島田和彦氏（農林水産省消費・安全局植物防疫課長）、「日本茶の輸出促進に向けた病害虫防除体系の検討状況」佐藤安志氏（農研機構果樹茶業研究部門茶業研究領域 茶病害虫研究ユニット長）、「生果実（いちご）の輸出促進に向けた病害虫防除の課題」武田光能氏（農研機構野菜花き研究部門野菜病害虫・機能解析研究領域長）、「諸外国のインポートトレランスの現状」横田篤宣氏（農薬工業会技術部長）。

講演終了後は、講演者らの登壇による総合討論。会場からの質問や意見も相次ぎ、農産物輸出促進に向けた植物防疫の果たす役割をめぐって、活発な意見交換が行われた。



喜びの受賞者、左から伊東、落合、高橋の各氏



輸出促進に向け、植物防疫の果たす役割は何か、議論を深め